

吾妻八景

長唄 全詞章

四世杵屋六三郎 作曲

文政十年（一八二七）頃

〔本調子〕 実にゆたかなる日の本の、橋の袂の初霞、江戸紫の曙染や
水上白き雪の富士、雲の袖なる花のなみ

御殿山なすひと群の、薫に酔ひし園の蝶、花の簪を垣間見に、青簾の小舟うたふ小唄の
声高輪に

〔二上り〕 遥あなたの

時鳥初音かけたる羽衣の、松は天女の戯れを、三保にたとへて駿河の名ある、台のよせいの
弥高く、見おろす岸の筏守

日を背負うたるあみだ笠、法のかたへの宮戸川、流れ渡りにいろいろの、花の錦の浅草や

御寺をよそに流れ男は、何地へそれし矢大臣、紋日にあたる辻占の
松葉簪二筋の、道に碑露踏みわけて、ふくむ矢立の隅田川、目につく秋の七草に、拍子通はす
紙砧

〔三下り〕 忍ぶもじ摺り乱るる雁の玉章に便を聞かん封じ目を、きりの渡に棹さす舟も、いつ
越えたやら衣紋坂

店清搔に引き寄せられて

つい居続けの朝の雪、積り積りて情の深み、恋の関所も忍が岡の、蓮によれる糸竹の
調べゆかしき浮島の

かたなすもとに籠りせば

楽の音共に東叡よりも、風が降らす花紅葉、手に手合せて貴賤の盟、弁財天の御影もる、
池の辺の尊くも、廻りて見ん八つの名所